言語文化研究ノート
―「引用」をめぐる問題―*

斎藤武生
神田外語大学

本稿は、英語文化圏における引用句辞典に注目し、そこに収録されているいくつかの引用文を言語文化研究の視点から論じたものである。第２節では、イギリスの言語文化の例として、ネルソンのことばをめぐる問題を論じたが、そこでは「引用(quotation)」と同時に、「誤った引用 (misquotation)」の問題についてもふれた。第３節では、「アメリカを創ったことば」の視点から、言語文化遺産としての引用文の問題を見た。

本稿がめざしたのは、「引用」をめぐるいくつかの問題について、通時的・文献学的研究のあり方を探る作業であった。

１．はじめに

日本に欠けているものの一つに引用句辞典があることを指摘し、ぜひ作ってほしいと要望したのは丸谷（2004）である。「日本語大シソーラス」（山口翼編：2003）の登場にからめて発言されたもので、「われわれは、最近になって、引用句の乏しい文化の寂しさにやうやう気がついたらしい。」という感想

*本稿は、福島県天栄村の British Hills で行われた神田外語大学大学院ＢＨセミナーの席で発表した内容を基に、あらたに書き起こしたものである。セミナーでのタイトルは「ことばの文化遺産と辞典」(2002 年６月 2 日)と「引用句辞典の中のチョムスキー」(2004 年６月３日)であった。

をもらしている。そしてさらに、「一国の言語は、歴史によって然るべく裏打ちされなければ安定を欠き、現在に生き未来に生きつづける力を失ふ。そして言語生活が伝統との縁を回復したとき、言葉の花はまづ引用という形で咲き乱れるだらう。」と語っている。

日本人が先人のことばに強い関心を示すことがあったとしたら、その多くは「名句」とか「名言」という観点からであった。たとえば、寺山修司の『ポケットに名言を』(1977) という小さな本にその一つの例を見ることができる。学生時代に出会った井伏鱒二の「花に嵐のたとえもあるさ、さよならだけが人生さ」ということばは寺山にとって特別な意味をもつものであった。その後、木村尚三郎・外山滋比古・村山吉廣の三氏の『(続)名言の内側』(1990; 1993)という本が出たが、この本はヨーロッパ、英米、中国といった文化圏の名言を扱ったものである。国外の名言への関心は、たとえば『ハートで読む英語の名言(上・下)』(加島祥造：1996) とか『世界名言集』(岩波文庫編集部：2002) のようなものにも見られる。最近のもので興味深いのは、日本国内の古代から近代までの古典的名言を扱った『知っておきたい日本の名言・格言事典』(大隅和雄他４名：2005) である。聖徳太子の「一に曰く、和なるを以て貴し...」から始めて松下幸之助の「貧困は罪悪であります」まで全部で 114 編の名言を選び出し、解説している。

英語圏は言語文化遺産としての言語表現を名言に限定せず、もう少し広い視野に立って先人のことばを収集してきたように思える。たとえば、John Bartlett の有名な引用句辞典のタイトルは *Familiar Quotations* である。"familiar" というのは「よく知られた(well known)」に加えて、「ありふれた(ordinary, commonplace)」の意味をもつもので、日本人の考える「名言」とは少しずれがある。Bartlett の辞典の初版(1855)

が意図したのは "an attempt to trace to their source passages and phrases in common use" であった。聖書とかシェイクスピアを中心とした文学的な香りの高いもの、という評価が定着している。版を重ねるなかで他の編集者の手が加わり、もう少し「通俗的」なものも追加されるようになってきたが、とりわけ、第 16 版(1992)からその傾向が強まったといわれる。現在出回っている 17 版(2002)になると、たとえば、アメリカの前大統領ビル・クリントン（Bill Clinton）の次のような発言も取り上げられている。16 版と 17 版の編集の総責任者をつとめたのは John Kaplan である。

(1) a. I experimented with marijuana a time or two. And I didn't like it, and didn't inhale, and never tried it again. *Television interview [March 29, 1992]*

b. It depends on what the meaning of the word "is" is. If the — if he —if "is" means is and never has been, that is not — that is one thing. If it means there is none, that was a completely true statement.

Grand jury testimony [August 17, 1998]

ビル・クリントンがモニカ・ルインスキーとの例の「不適切な関係」について語ったことは日本でもよく知られているが、最近の引用句辞典 McGovern(2005) は次のようなかたちで載せている。

(2) I did have a relationship with Ms Lewinsky that was not appropriate. In fact, it was wrong.
1998 Television broadcast to America, 18 Aug. In *The Times*, 19 Aug.

この辞典はもちろんスキャンダルだけを問題にしたのではなく、クリントン大統領のその他の側面に関係した 20 個ほどの

引用文も載せている。政治への関心がもともと強い辞典と見え、リンカーン（Abraham Lincoln）については9個、ケネディー(John F. Kennedy) については36個の引用文を収録している。いずれも社会的にプラス値をもつ表現を拾っている点が、クリントンの場合とは異なっている。因みに、この辞典には、チョムスキー([Abram] Noam Chomsky) 以外、言語学者からの引用は見あたらない。

表現内容を記録にとどめる場合、編集者の何らかの価値観が入り込むのは避けがたいだけでなく、当然のことでもある。たとえば「名言」のように、ポジティブな価値観に支えられた言語文化遺産とは別に、ときには、引用される側の者にとって好ましくないものが選択され、負の言語文化遺産として引用句辞典の中にとどまる場合もある。

英語文化圏に大小さまざまな引用句辞典が存在することは確かだが、その多くが名言の類を主たる関心事としてきたこともまた確かであろう。この点では、日本からの貢献として、日本の英文学者の手になる『研究社引用句辞典』（1952）が存在することも忘れてはならないであろう。この辞典は、日本における英文学研究のために、戦後の復興期のさなか市川三喜、西川正身、清水護の三氏を編集者として出版されたものである。聖書、シェイクスピア、その他の作家・詩人たちからの引用を中心に編集されたもので、正の言語文化遺産に着目した辞典として学術的価値が高い。その後、「英語名句事典」を名乗る外山滋比古他 (1984)も出版されたが、引用文に丁寧な翻訳と解説を与えたことによって、聖書・英米文学・諺など、英語圏での言語文化遺産が読者にとって近づきやすいものとなった。

2．ネルソンと引用

英国艦隊を指揮し、1805年のトラファルガル海戦(the Battle

of Trafalgar)でナポレオンの率いるスペイン・フランス連合艦隊を破ったネルソン(Horatio Nelson)が、開戦を前にして発したことばはよく知られている。また、死を目前にして口にしたとされることばも引用句辞典には残されている。最もよく知られているのは、開戦を前にして全艦隊に向けて発したという次のことばであろう。３通りの表現形式で記録されている。

(3) a. England expects that every man will do his duty.
b. England expects every man will do his duty.
c. England expects every man to do his duty.

(3a) の形を採用しているのはオックスフォード大学出版局から出ている引用句辞典 Knowles (1999[5]) である。同じオックスフォード系の小型引用句辞典 Ratcliffe(2001[2]) も同じ選択をし、その根拠をR. Southeyの書いたネルソンの伝記(1813)においている。Brewer（1995[15]）も（3a）の形を採用し、当初ネルソンが意図したのは expects ではなく、confides という語だったことを付け加えている。

Hendrickson(1997)が挙げているのは (3b) の形である。前節ですでに触れる機会のあった Bartlett (2002[17]) が挙げているのも、接続詞の that を省いた (3b) である。少し奇妙なのは、先に見たオックスフォード系の大・小の引用句辞典と同じく、その根拠をネルソンの伝記におきながら、Bartlett が何故か (3a) ではなく、(3b) を選んでいる点である。いずれかが Southey の伝記を見ていないか、あるいは、見ても正しく伝えていないということになる（そういう筆者も、残念ながら、R. Southey の伝記 *Life of Nelson* は未見)。ネルソン自身の最初の案が expects ではなく、 confides であったという逸話は Bartlett も紹介しているが、さらに Bartlett は、England expects が当初の案では Nelson expects であったと

いう話を付け加えている。前節でふれた McGovern(2005) は "I wish to say Nelson confides that every man will do his duty" という表現をネルソンのことばとして引き、その後変更して England expects ... になったと解説している。

confide を expect に変えるというのは、単に信号を送る際の手間と時間の問題、つまり expect は初めからコードブックに載っているので旗の数が少なくてすむが、 confide は載っていなかったため、綴り字に従って一文字ずつ旗を掲げるしかないという事情があったようで、変更した理由は容易に理解できる。一方、文の主語を Nelson から England に変えた理由についてはあまりはっきりしない。しかし、結果的に見るなら、この変更は大変重要な役割を果たすことになったのではないかと思われる。つまり、expect の主語に England をおくことで、ネルソンのことばは、当初の私的で平凡なものから、力強い一種の「名言」としての位置づけを獲得することになったと考えられるからである。

expect の主語を Nelson から England に変えることが力強さを生むというのは、期待感を表明する主体が「個人」から「国」に変わるからである。つまり、要請の主体が「私」から「公」に変わったからだと考えれば納得がいく。しかし、これですべてが片づいたわけではない。考えなければならないのは expect という動詞のもつ特性である。

まず、ここで問題にしている expect の意味が日本語の「(当然のこととして) 期待する」とほぼ同義である、と考えることにしよう。その上で、日本語の「期待する」がどのような意味合いで用いられるかをまず見ることにしたい。

たとえば、社長が新入社員に向かって、「君たちが最善を尽くすことを期待する」と言うのはごく普通の言い方として問題ないが、新入社員が社長に向かって「社長が最善を尽くすことを期待します」と言うのは少し変である。また、先生が

生徒に「頑張りを期待する」と言うのはよいが、生徒が先生に「頑張りを期待します」と言うのは、冗談で言う場合は別として、かなり抵抗があるように感じられる。つまり、「AがBに...（をすること）を期待する」という日本語の表現には、AとBとの間には何らかの上下関係がある場合に最もよく使われる、というようなことがあるように見えるのである。英語の expect を「期待する」という意味で使う場合にも、これと似た状況が生じるのではないかと考えられる。もしこのような見方が正しいとするなら、「ネルソン（個人）が各人(every man)に最善を尽くすことを期待する」とするより、「英国は各人が最善を尽くすことを期待する」とする方が一種の「上下関係」が明確で、迫力のある言い方になったと言ってよいであろう。なぜなら、指揮官 (Nelson) と部下としての人(man)との間に上下関係があるのは当然だが、国 (England) と国の兵士としての人 (man) との間の関係の比ではないからである。また、表現の迫力を助けたのは「各人」を表すのに each man とせず、every man としたことも関係しているであろう。each man は「A or B or C ... 」といった「個々バラバラに」の意味合いで用いられ、まとまりがない。一方、every man であれば「A and B and C ... 」といった個々人の団結とかまとまりが表現され、all men と言うに近い意味合いを表現することにもなる。一致団結が必要な場面では、この方がはるかにすぐれた表現になるであろう。

(3c) の形を採用しているのは、おもしろいことに、英米の辞書を代表する OED [*Oxford English Dictionary*] (1992[2]) と Webster [*Webster's Third New International Dictionary*] (1961[3]) である。これらの辞書は、それぞれ、expect の語義を示す際、その用例としてネルソンのことばを引いたのである。

(4) a. EXPECT = "to look for as due from another. In stronger sense: To look for (something) with an implied injunction or requisition"
England expects every man to do his duty! (OED)

b. EXPECT = "to consider (a person) obligated or in duty bound"
England expects every man to do his duty. (Webster)

OED は、Nelson's last signal とした上で、1805 年の用例として採用したもので、典拠を Southey の伝記としている。すでに見た Bartlett やオックスフォード系の引用句辞典が典拠にしたのも同じ伝記であることを考えると、典拠をめぐる混乱はさらに拡大したことになる。

開戦に当たってのネルソンのことばが(3a)、(3b)、(3c)の三通りの表現形式で今日に残されてきていることを上では見た。(3a)と (3b) は接続詞の that が省略されているどうかで、基本的には同じ表現形式と見ることもできる。そうなれば、(5a,b) のように、二つに整理し直すことも可能である。

(5) a. England expects (that) every man will do his duty.
b. England expects every man to do his duty.

(5b) は辞書に多く見られる形と言ってよいが、もちろん、辞書だけでないことは、たとえば、かなり早い時期の Ross(1939)のような本が (5b) を採用していることからもわかる。問題は、なぜ二つの形が今日まで生き残ったのかということになる。それを見る前に、(5a,b) が知的に同義 (cognitively synonymous) の関係にあることを確認しておくことが必要であろう。

expect という動詞が取り得る構造の問題を見ることにしよう。想起されるのは Chomsky(1965) の議論である。Chomsky

は、自分が知る限り、どの英文法書もその違いについて根本的な説明を与えてこなかったと述べたのが (6a)、(6b) の例である。

(6) a. I persuaded John to leave
b. I expected John to leave

表面的には同じ統語構造をもつように見える(6a)、(6b)の構造上の違いを、根底にある深層構造(underlying deep structure)の違いにまで遡って説明したのが Chomsky であった。

ここで注目したいのは、expect についての構造分析である。Chomsky は persuade との違いを明らかにするため、expect について (7a,b) の例を挙げ、その深層構造が (8a,b) であることを主張した。

(7) a. I expected a specialist to examine John.
b. I expected John to be examined by a specialist.

(8) a. Noun Phrase — Verb — Sentence
(*I — expected — a specialist will examine John*)
b. Noun Phrase — Verb — Sentence
(*I — expected — a specialist will examine John*)

この説明をネルソンのことばに当てはめてみると、次の (9a) は (9b) の深層構造をもつことになる。

(9) a. *England expects every man to do his duty*
b. Noun Phrase — Verb — Sentence
(*England — expects — every man will do his duty*)

さらに、一歩進め、(10a) [= (5a)] について、(10b) の深層構造を想定することもできる。

(10) a. *England expects (that) every man will do his duty*

b. Noun Phrase — Verb — Sentence

(*England — expects — (that) every man will do his duty*)

つまり、「ネルソンのことば」として伝えられる(9a) と (10a) は、表面上は確かに異なる形をしている。しかし、根底では(9b)、(10b)のように、基本的に同じ深層構造をもつもので、両者は知的に同義だということがわかる。そうなれば、(9a) と (10a) の二つの形が今日まで生き残ってきた理由もそれなりに見えてくる。

しかし、「形が違えば意味も違う」という考え方もあり、問題がこれですべて片づくのかどうか疑問も残る。たとえば、語用論的な視点から含意 (implication)とか暗意 (implicature) を問題にすることも考えられる。そこで、John Sinclair が編集責任者をつとめた *Collins COBUILD English Usage* [以下 COBUILD] に当たってみると、 多少この点にふれていることがわかる。that 節を取るか、to 不定詞を取るかで、両者にニュアンスの差があることを、次のように説明しているのである。

(11) You can sometimes use a 'to'-infinitive after **expect** instead of a 'that'-clause. For example, instead of saying 'I expect Johnson will come to the meeting', you can say I **expect Johnson to come** to the meeting': However, the meaning is not quite the same. if you say 'I expect Johnson will come to the meeting' you are expressing a simple belief. If you say 'I expect Johnson to come to the meeting', you are indicating that you want Johnson to come to the meeting and that you will be annoyed or

disappointed if he does not come.

COBUILD の初版も第２版も、expect に対する記述はまったく同じである。

少し気になるのは語義の問題で、COBUILD が扱った expect の意味とネルソンのそれとの間には微妙な違いがあるのではないか、ということが推測できる。そこで Della Summers を編集責任者とする *Longman Dictionary of English Language and Culture* で expect の項に当たってみると、(12a) と(12b) の区別をしていることがわかる。(関係のある部分だけを示す)

(12) a. to think or believe (that something will happen):
[+ (*that*)]: *I expect (that) she'll pass the exam.*
[+ *obj* + *to-v*] *I expect him to fail the exam.*

b. to have or express a strong wish for (something) that (someone) will do something, with the feeling that this is reasonable or necessary:
[+ *obj* + *to-v*] *You can't expect children to be quiet all the time.*

COBUILD の that 節を伴う場合の説明は、(12a)の語義を念頭においたものであることが読み取れる。問題は to 不定詞を伴う場合で、(12a) または (12b) の可能性があることになるが、念頭にあったのはおそらく (12b) の語義であったと思われる。もしこの推測が正しいとなると、COBUILD が扱った例、つまり、(13a)と (13b) は、ニュアンスの違いというより、expect の語義の違いとして説明されることになる。

(13) a. I expect Johnson will come to the meeting.
b. I expect Johnson to come to the meeting.

英語圏における「言語文化遺産」としてのネルソンのことばが、実は (3) に示したように、3通り（実質的には、2通り）の仕方で今日まで伝えられてきたことを見た。一見奇妙に見えるこの現象の背後には、典拠とした Southey の伝記の確認が十分でなかった、というところに問題があるらしいことはすでに見た。また、expect の意味をめぐる問題として、この動詞が that 節、to 不定詞節のいずれを従えても知的には同義であるという事情が三つ（実質的には、二つ）の表現形式の共存を許した、ということも考えられることを見た。

しかし、もっと基本的な原因ということであるなら、そもそも、ネルソンが旗艦船 Victory 号の船上で発した信号は、文字そのものによるものではなく、旗を用いた信号(flag signal)であったというところに求めるべきであろう。信号は延べ 31 枚の旗を 12 回掲揚(twelve hoists)することで発せられたという。文字化すれば(14)の文、つまり、(3a)を発したことになる。

(14)　England expects that every man will do his duty

それぞれの語をコードブックに従って3枚ずつの旗で、コードブックになかった duty だけは文字ごとに D(1枚)、U(2枚)、T(2 枚)、T(2 枚)、Y(2 枚)として掲揚したと考えられている。expect の代わりにコードブックに含まれない confide を用いていたなら、duty の場合のように、一字一字に旗が必要になり、戦場には不向きな、そして時間のかかる作業を余儀なくされていたことであろう。

もし「ネルソンのことば」の正しい引用の形が (14) [= (3a)] であるとするなら、(3b)、(3c) は「誤った引用 (misquotation)」の形ということになる。

誤った引用が一般化した例には、たとえば、『カサブランカ』という映画で、ハンフリー・ボガートが酒場でピアニス

トのサムに向かって言ったとされる台詞 "Play it again, Sam!" (もう一度弾いいてくれ、サム) の例がある。この例について、Knowles (2005[2]) は次のように説明している。

(15) **play it again, Sam** popular misquotation of Humphrey Bogart in *Casablanca* (1942), subsequently used as the title of a play (1969) and film (1972) by Woody Allen. In the film, Humphrey Bogart says, 'If she can stand it, I can. Play it!'; earlier in the film Ingrid Bergman says, 'Play it, Sam. Play *As Time Goes By*.'

歴史に残されたことばとして、これまで、トラファルガル海戦を目前にして発したネルソンのことばの問題を見たが、その戦いで再び傷ついたネルソンが、死の迫るさなかに発したとされるのは (16a,b) である。

(16) a. Kiss me, Hardy.
b. I have done my duty.

Bartlett (2002[17]) は(16a)と(16b)の両方を載せているが、Knowles(1999[5]) は (16a) のみを載せている。同じオックスフォード系の Ratcliffe の引用句辞典は、初版 (1994) ではネルソンの 臨終のことば (last words)として(16a)、(16b)の両方を載せていたが、新版(第2版) では、親版(?) Knowles(1999[5]) の記述にでも合わせたのか、(16b)を削除し、(16a) のみを載せている。引用句辞典ではないが、Ross (1939) も (16a) のみである。その際、Ross は、英雄ネルソンには一見似つかわしない (16a) の発言に対し、本当は聞き間違いで、 "Kismet, Hardy." と言ったのではないか、とする人が一部に存在することを紹介している。Evans(1978)もこの問題にふれ、19 世紀の人々を当惑されることばであったとして、kismet とする解

釈があることを紹介している。しかし、kismet (= "fate" or "destiny")という語が、(おそらくトルコ語から) 英語に入ってくるのは 19 世紀も中頃に近い時期で、一部の人の主張はもちろん間違っている、とも述べている。

ネルソンが "Kiss me, Hardy." と言ったのは、船上でまさに死を迎えようとしているときであった。相手は Thomas Hardy である。Hardy がネルソンの頬に二度キスをすると、ネルソンは "Now I am satisfied. Thank God, I have done my duty." と言ったと伝えられている。最後の部分は自分の発した (3a) との帳尻合わせでもあった。ネルソンがなぜキスを求めたかをめぐっては、その後も議論はあるが、発言そのものには、そばに居合わせた医者のほか、少なくとも２名の証人がいるとされている。

３．引用をめぐるその他の問題

先人のことばを引用句辞典というかたちで書きとめてきた英語文化圏では、現存する人のことばを伝統ある辞典が収録するということもまれに見られる。たとえば、言語学者として著名なチョムスキーの場合であれば、 Bartlett (2002[17]) にすでにその名は刻まれている。ただ、収録されたのは次の１例である。

(17)　　Colorless green ideas sleep furiously.

Syntactic Structures [1957], ch.2

脚注では、意味とシンタクスとは互いに独立しているということを示す例である、と説明している。(17) は言語学の関係者の間ではよく知られた例文で、統語的に問題がないだけに、詩的な意味解釈を誘う例文としても知られている。誰が最初にこの例文の存在に気づいたかは不明だが、Bartlett だけでなく、Ratcliffe (1994[1]) や Knowles (1999[5]) もこの例文を収録

している。

チョムスキーについて「最も引用される現存の著者」と呼んだのはシカゴ・トリビューン紙である。 Cogswell (1996) は、その書き出しの部分で、次のように記している。

(18) **— Noam Chomsky is one of the ten most-quoted writers of all time —**

The *Chicago Tribune* has called Professor Chomsky "the most cited living author," adding that among intellectual luminaries of all eras, he ranks eighth, just behind Plato and Sigmund Freud. (p.1)

そして、みずから多くの引用文を引き、「初心者向け」にチョムスキー像を描き出している。

Crystal & Crystal (2000) のような言語学者の作った引用句辞典では、当然、チョムスキーの書き物からの引用は豊富だが、一般の引用句辞典で言語学者の関係する引用を探すのはむずかしい。一般受けするような内容をはじめから含んでいないためであろう。

ただし、チョムスキーの場合は少し事情が違っている。というのは、単に言語学者として知られているだけでなく、「知識人」という側面でもその発言が注目されてきた人だからである。「知識人の責任(the responsibility of intellectuals)」を重視するチョムスキーの発言には、一般の人々の耳や目を引きつけるものがあり、とりわけアメリカの政治に関係した発言がいろいろな場で引用される機会が多い。引用句辞典がそれを収録する機会も増えることになる。たとえば、McGovern(2005) は(17)の例を載せる代わりに、そうした類の発言を３つほど載せている。Knowles (1999[5])の場合は、(18)を載せると同時に、次の引用文を載せている。

(19) a. The empiricist view is so deep-seated in our way of looking at the human mind that it almost has the character of a superstition.

radio discussion, in *Listener* 30 May 1968

b. As soon as questions of will or decision or reason or choice of action arise, human science is at a loss.

television interview, in *Listener* 6 April 1978

c. The Internet is an elite organization; most of the population of the world has never even made a phone call.

in *Observer* 18 February 1996

引用句辞典をめぐる英語圏の伝統をアメリカ文化の問題に限定して考えてみると、これまでとはまた少し違った姿が浮かび上がってくる。たとえば、Edelhart & Tinen (1983) のラッパーには副題として "7000 Quotations on America and Her: people・landscape・history・ culture・cities・states・regions・landmarks" ということばが掲げられているが、この本は、明らかに、アメリカという国の「アメリカらしさ」をことばの面から追求した引用句辞典である。Miner & Rawson(1997) も、扱っている内容こそ違うが、ねらいとしているのはアメリカ的なものの証としての引用文の収集である。換言するなら、アメリカという国、さらに言うなら、アメリカ文化の証をことばの世界に求めようとする動きである。その裏には、「アメリカを創ったことば」とか「アメリカを動かしたことば」の発想を見て取ることができる。なお、最近、この辞典の改訂版（オックスフォード版）が、著者名の順序を逆にした Rawson & Miner (2006) として出版されたことを付け加えておくべきであろう。

Lawson (1957[2]) もまた同じような発想に支えられた引用句

辞典で、副題には "A Pageant of American Quotations" とある。アメリカ建国の歴史およびその後の発展の歴史をスローガンを中心に扱っている。いくつか例を挙げておこう。

(20) a. Taxation without representation is tyranny.

Attributed to James Otis

b. Give me liberty, or give me death!

Patrick Henry March 23, 1775

c. We hold these truths to be self-evident, — that all men are created equal; that they are endowed by their creator with certain unalienable rights; that among these are life, liberty, and the pursuit of happiness.

Thomas Jefferson

Declaration of Independence

July 4, 1776

d. Remember the Alamo!

Colonel Sidney Sherman

April 21, 1836

(20a)は、代表権なき課税は暴政である、としてわが国の世界史の教科書などにもしばしば登場している。(20b) も独立戦争さなかのことばとして記憶されている。(20c) は独立宣言書のなかでも最もよく知られた部分で、all men are created equal という表現は 1970 年代の「政治的公平さ(political correctness)」を求める運動のなかで槍玉にあがったことは記憶にあたらしい。Maggio(1991) が公正な言い方として示した代案は次のようなものであった。

(21) a. all men and women/women and men are created equal

b. all people/we are all/all of us are created equal

(20b) の独立宣言書の最後に登場する "life, liberty, and the pursuit of happiness" の部分は、日本国憲法の第 13 条にある「生命、自由及び幸福の追求（に対する国民の権利...）」という文言に採用されている。日本国憲法の英語訳では "(Their right to) life, liberty, and the pursuit of happiness ... " と表現されている。

1836 年、アラモの砦（伝導布教所）で、テキサス独立軍がメキシコ軍と戦い、187 名が全滅するという事件があったが、その後、アメリカ軍を組織して独立を勝ち取る際のスローガンとして用いられたのが (20d) である。Remember で始まるこのスローガンは、よほどアメリカ人の戦意を奮い立たせる力があると見え、1898 年の米西戦争での Remember the Maine!（メイン号を忘れるな）を経て第 2 次世界大戦の Remember Pearl Harbor! につながっている。

「アメリカを創ったことば」という視点からアメリカ史を書いたのは Bailey (1976) である。副題には "The Nation's Story in Slogans, Sayings, and Songs" とある。アメリカの歴史を知る上では、欠かせないものの一つであろう。

Bailey の本は本格的な歴史書といった趣を備えたもので、多少取り付きにくい面をもっている。似た観点に立ちながら、もう少し一般向けに書かれたのが Flexner(1976)で、Bailey の本と同じ年に出版されている。アメリカの俗語についての専門家としての立場から、ことばを手がかりにして、アメリカの社会生活史を描き出そうとしたもので、大項目の下でアメリカ的な日常表現の起源を探り、解説している。(20d) の Remember the Alamo! は大項目で、Remember Pearl Harbor! は第 2 次世界大戦のなかの小項目で解説している。

Flexner の書名 *I Hear America Talking* がホイットマン

（Walt Whitman）の詩のタイトル "I Hear America Singing" (1860) のもじりであることは言うまでもない。6年後に続編ともいえる Flexner (1982) が出るが、この方のタイトルは *Listening to America* で、一冊目の自著のタイトルを踏まえとしている。Flexner は 1990 年に亡くなるが、それから7年後に Flexner & Soukhanov (1997) が世に出る。もう一人の編者 Soukhanov は次のことばを巻頭に記している。

To the memory of
Stuart Berg Flexner
March 22, 1028 — December 3, 1990
who listened to America, heard America talking, and brought
the people's history back to them — in their own words

参考文献

市河三喜・西川正身・清水護（編）『研究社引用句辞典』（研究社：1952）

岩波文庫編集部（編）『世界名言集』（岩波書店：2002）

大隅和雄他4名　『知っておきたい日本の名言・格言事典』（吉川弘文館：2005）

木村尚三郎・外山滋比古・村山吉廣『名言の内側 — 歴史の発想に学ぶ』（日経新聞社：1990）

———『続名言の内側 — 色褪せぬ先人の知恵』（日経新聞社：1993）

寺山修司『ポケットに名言を』（角川文庫）（角川書店：1977)

外山滋比古他（編）『英語名句事典』（大修館書店：1984）

丸谷才一　「ほしい辞書」『図書』第659号（岩波書店：2004.3）

Bailey, Thomas A. 1976. *Voices of America: The Nation's Story in*

Slogans, Sayings, and Songs. New York: The Free Press.

Bartlett, John. ed. 2002[17] . *Bartlett 's Familiar Quotations*, ed. by Justin Kaplan. Boston/N.Y./London: Little, Brown.

Camp, Wesley D. ed. 1990. *Word Lover's Book of Unfamiliar Quotations*. Peramus, NJ: Prentice Hall Press.

Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: The M.I.T. Press.

Cogswell, David. 1996.*Chomsky for Beginners*. New York: Writers and Readers.

Crystal, David & Hilary Crystal. eds. 2000. *Words on Words: Quotations about Language and Languages*. London: Penguin Books.

Edelhart, Mike & James Tinen. 1983. *America The Quotable*. New York: Facts On File.

Evans, Bergen. ed. 1978. *Dictionary of Quotations*. New York: Avenel Books.

Flexner, Stuart Berg. 1976. *I Hear America Singing: An Illustrated History of American Words and Phrases*. New York: Simon & Schuster.

——— 1982. *Listening to America: An Illustrated History of Words and Phrases from our Lively and Splendid Past*. New York: Simon Schuster.

——— & Anne H. Soukhanov. 1997. *Speaking Freely: A Guided Tour of American English from Plymouth Rock to Silicon Valley*. New York: Oxford University Press.

Hendrickson, Robert. 1997. *The Facts On File Encyclopedia of Word and Phrase Origins*. New York: Facts On File.

Knowles, Elizabeth. ed. 1999[5]. *The Oxford Dictionary of Quotations*. Oxford: Oxford University Press.

——— ed. 2000[1]. 2005[2]. *The Oxford Dictionary of Phrase and*

Fable. Oxford: Oxford University Press.

Lawson, Robert. 1957[2]. *Watchwords of Liberty: A Pageant of American Quotations*. Boston/Toronto: Little, Brown.

Maggio, Rosalie. 1991. *The Dictionary of Bias-Free Usage*. Phoenix, Arizona: The Oryx Press.

McGovern, Una. ed. 2005. *Webster's New World Dictionary of Quotations*. Hoboken, NJ: Wiley.

Miner, Margaret & Hugh Rawson. eds. 1997. *American Heritage Dictionary of American Quotations*. New York: Penguin Books USA.

Ratcliffe, Susan, ed. 1995[1], 2001[2]. *The Little Oxford Dictionary of Quotations*. Oxford: Oxford University Press.

Rawson, Hugh & Margaret Miner. 2006. *The Oxford Dictionary of American Quotations*. Oxford:Oxford University Press.

Ross, E. Denison. 1939. *The English Language*. London: Longmans, Green.

Sinclair, John *et al.*, ed. 1992[1], 2004[2]. *Collins COBUILD English Usage*. London: Harper Collins.

Summers, Della *et al.* eds. 1992. *Longman Dictionary of English Language and Culture*. Essex: Longman.

261-0014
千葉県千葉市美浜区若葉１－４－１
神田外語大学
言語科学研究科

saito-t@kanda.kuis.ac.jp